

【翻訳】

コンラート・フォン・メーゲンベルク 『自然の書』（第3章：動物）〈前編〉

萩 野 蔵 平 訳

**Konrad von Megenberg: „Das Buch der Natur“.
(III. HIE HEBT SICH AN DAZ DRITT STÜCK DES PUOCHES.
A. VON DEN TIEREN IN AINER GEMAIN.)**

übersetzt von Kurahei OGINO

要旨

„Das Buch der Natur“, das zwischen 1347 und 1350 von Konrad von Megenberg verfasst wurde, ist die älteste bedeutende Naturgeschichte in deutscher Sprache. Es ist weitgehend eine Übersetzung von Thomas de Cantimpré's „Liber de natura rerum“ (zwischen 1225/26 und 1241 entstanden), enthält aber auch neue Beobachtungen und Ergänzungen. Dieses im Mittelhochdeutschen verfasste Lehrbuch war auch in Laienkreisen lesbar und fand rasch sehr weite Verbreitung (über 100 Handschriften). Die folgende japanische Übersetzung, der die von Franz Pfeiffer herausgegebene Textausgabe „Das Buch der Natur“ (1861/1994) zugrunde liegt, behandelt die erste Hälfte des dritten Kapitels „Von den Tieren in einer Gemein“.

キーワード：コンラート・フォン・メーゲンベルク (Konrad von Megenberg)、『自然の書』 (Das Buch der Natur)、トマ・ド・カンタンプレ (Thomas de Cantimpré)、『事物の本質についての書』 (Liber de natura rerum)、自然誌 (Naturgeschichte)。

【解説】

1. はじめに

以下は、コンラート・フォン・メーゲンベルク：『自然の書』（Konrad von Megenberg：„Das Buch der Natur“, 1347～1350）の第3章「動物一般について」の前半部分（冒頭から23節まで）を訳出したものである。底本には、Pfeiffer版（1861／1994）を使用し、Schulz（1897）とSollbach（1989）の2種類の現代ドイツ語訳を適宜参照した。

『自然の書』は、ドイツ語で書かれた最初の自然科学書であると同時に、100点以上の写本が現存していることからわかるように、中世・近世において最もよく読まれた著作の一つである。しかし

ながらその存在は、日本においてはまだ十分に知られているとはいえ、抄訳ではあるが今回の翻訳でその内容の一端を紹介したい。その内訳は以下の通りであるが、そこには実在の動物の他に、存在が特定できないあるいは空想上のものと思われる動物（例：16. カタプレバ）なども含まれている：

1. ロバ、2. イノシシ、3. 飼育されたイノシシ、4. ヘラジカ、5. アカシカ、6. 水牛、7. ボマクス、8. ラクダ、9. イヌ、10. ビーバー、11. ヤギ、12. カモシカ、13. ノロジカ、14. カテン、15. シカ、16. カタプレバ、17. キュログリルス、18. カロプス、19. キュログラータス、20. ダマジカ、21. テン、22. アナグマ、23. ヒトコブラクダ。なお本訳文では、読みやすさに配慮して適宜段落分けを行った。

最後になったが本翻訳は、長年続けているドイツ語輪読会において、2011年11月から毎月2回のペースで開始した訳読作業の成果の一部であることを記し、そのメンバーとして熱心に参加していただいた吉田李佳、岩佐銘江の両氏にここに改めて感謝申し上げる。

2. 作者と作品について

作者コンラート・フォン・メーゲンベルク（1309～1374）は、ドイツの中部フランケン地方のメーベンベルク（Mäbenberg）の出身と言われる。エアフルトとパリで学び、パリとウィーンで哲学と神学とを講じた後、1348年にレーゲンスブルクに戻り、そこの司教座聖堂参事会員として生涯を過ごした。彼の著作の大部分はこの時期に書かれたものである。またコンラートは、聖職者としてのみならず政治・行政の分野においても信望が篤かったとみえて、1357年にエメラムの修道院長選出を巡るトラブルの処理のために、また1361年には（その使命の内容は伝えられていないが）カール4世の特使として、いずれも当時アヴィニョンにあったローマ教皇庁に派遣されている。

彼の代表作の一つである『自然の書』は次の8章からなっている：Ⅰ 人間とその一般的本性について、Ⅱ 天と7個の惑星について、Ⅲ 動物一般について、Ⅳ 木々について、Ⅴ 草について、Ⅵ 宝石について、Ⅶ 金属について、Ⅷ 摩訶不思議な源泉について。ところで本書は、ラテン語を解しない一般庶民に当時の自然科学の知識を提供することを目的としてドイツ語で執筆されたために好評を博し、多くの写本を生み出したが、その内容の大部分はトマ・ド・カンタンプレ（Thomas de Cantimpré, 1201～1263）の『事物の本質についての書』（Liber de natura rerum, 1225/26～1241）からの翻訳である。トマは、ケルンで聖アルベルトゥス・マグヌスから哲学と神学を学び、ベルギーのルーヴェンで修道院副院長を務めた人物だが、彼は聖職者であると同時に古代からの自然誌に精通した博物学者でもあった。コンラートはそのトマの著作に依拠して『自然の書』をまとめたのであるが、それは原典のまったくの受け売りではなく、コンラートはその構成と内容に関して、自らの考察と古代・中世の著作（アリストテレス、プリニウス、フィシオロギス、ソリヌス、イシドール、ヤコブス）を広く渉獵することによって（Pfeiffer（1861/1994）、p.494参照）、原著に独自の補足と変更を加えたのであった。誌面の制約上、ここでその詳細に立ち入ることはできないが、例えば、原典と比べ全体が19章から8章に整理統合されている半面、第Ⅱ章の「天体」や第Ⅴ章「草」において記事が大幅に増えていることなどが特に目につく。

3. 中世の自然観と自然認識

最後に、Sollbach (1989) に依拠しながら、『自然の書』の理解に欠かすことのできない中世の自然観と自然認識について簡単にまとめておこう。

中世ヨーロッパ社会は、キリスト教の世界観によって規定されており、当時の学問研究の目的は、「聖書」と「世界」という二つの書物を読み解くことにあった。第一の書物である聖書には、文字通り神の啓示が示されており、それを正しく解読するための手段として生まれたのが文法・論理学・修辭学を土台とする神学研究である。またその一方で、神によって創造された自然・世界を解読するための方法として重視されたのが自然科学である。もっとも当時の自然科学は、現代のそれと異なり、知が様々の領域に細分化する以前のもので、植物学・動物学・天文学・医学・鉱物学、そして魔術・占星術などが混然一体となった「自然誌」(Naturgeschichte) と呼ばれる知識体系を成していた。

この知識体系は、学者自らの経験や観察に発するものというよりも、主として二つの「権威」に基づいている。その一つが古代の学者たち（アリストテレス、プリニウス、ソリヌス、イシドール、ヤコブスなど）やキリスト教の教父たち（アウグスティヌス、ヒエロニムス、アンブロシウスなど）の諸著作である。実際、コンラートは（そして彼が依拠したトマ・ド・カンタンプレも）説明の妥当性・正当性の根拠をそれらの賢者たちに負っている。そしてもう一つの権威、そして究極の権威と見なされていたのが聖書であって、すべての学問的主張は、聖書に合致するか少なくとも矛盾しないことが当然の前提とされた。

ところでキリスト教的世界観からすれば、神によって創造された世界は、それ自体として存在するのではなく、そこに常に何らかの意味が隠されているはずであり、世界のすべては神のアレゴリーと考えられていた。すなわち世界は、神が人間の救済のために用意した道具であり、そこには形而上学的・宗教的な意味が含まれているという考え方である。したがって、当時の自然科学の目的は、近代のそれと異なり、自然現象の客観的な記述それ自体にあるのではなく、その背後に存在するはずの神が与えた意味・神の教えを人間理性を用いて明らかにすることが重要であった。中世の自然科学は、主観的でプリミティブな印象を受けることがあるが、そのような印象は、当時の学術書を見ると実際はかなり詳細で実証的な観察も認められることから推測されるように、中世人の認識レベルの問題というよりは、関心の方向性が違っていたことに起因すると考えるべきであろう。

コンラートも、当時の他の学者同様、自然誌を人間を道徳的・宗教的に教化するための絶好の教科書と捉え、各節において様々な動物の譬え話を披露している。聖職者でもあったコンラートに特徴的なことは、彼がとりわけ教会や聖職者の堕落をきびしく糾弾していることである。例えば、獐猛なタカを例にあげ、この猛禽は、罪人から賄賂を受け取り無罪放免にする聖職者や裁判官の譬えであると説明する。またその反対に、頭はウシで、胴体と腿はウマの姿をしているボマクスと呼ばれる（空想上の）動物（第7節）は、「人々の上に立つりっぱな主席司祭」の譬えと解釈している。なぜかといえば、この動物は角が内側に曲がっているので、角を突き立てても他の動物を傷つけることがないのと同じく、この動物に見立てられる立派な司祭も信徒の魂を言葉で傷つけないからである。

以上、『自然の書』の理解に不可欠と思われる中世の自然観と自然認識についてその概略を説明してきたが、最後に、本書の翻訳と研究の意義について一言触れてこの解説を終わることにしよう。『自然の書』全体のみならず、中世社会全般に通底する根本認識は、「世界は全てつながっている」と

いう認識であろう。例えば、宇宙を「マクロコスモス」、人体を「ミクロコスモス」と捉え、その間には対応しあう「照応関係」があるとする「体液病理説」や「四大説」などに見られる世界観がその1例である。そして、近代自然科学は、まずはこの「存在の連環」を解体することによってはじめてその発展が可能になったことは確かに事実であろう。しかし現代社会は、過度に細分化した自然科学への反省から、逆にエコロジカルな、つまり「全てはつながっている」という世界観が再び注目されつつある時代であると言えるだろう。今回の翻訳とそれに続く研究が、中世の世界観の再認識のさらなる契機となることを期待したい。

【訳】

第三章

A 動物一般について

本書の第三章ではあらゆる動物について述べる。すなわち、まず陸生動物、次にすべての鳥類、そして水生動物についてである。

アリストテレスは、2足あるいは4足歩行の動物には血液が多いが、足の数がそれ以上ある動物には血液がないと述べている。ここでいう血液とは静脈を流れる血液のことだが、そのような血液は、シラミのような昆虫には存在しない。というのも昆虫には、プリニウス¹が言っているように、静脈がないからである。一般的な見解では、すべての水生動物は、まるで骨からできているかのような固い目をしている上に、海の塩水が中のやわらかい目を傷めることのないようにその表面を固い皮膚が覆っているという。なぜかという、もし自然が魚の目を他の動物の目よりも頑丈にしられなかったならば、その目は塩水に耐えきれないであろうから。ここでいう魚の固い目とは、哀れなこの世というはかなくもうつろいやすい海に耽溺するこの世の人間の頑なな心のことを指している。彼らは、改心して心を高めたり柔和にすることをしないので、霊的なものに思いをはせることができないし、また彼らの心の中に永遠の叡智という海水が入り込むこともないのである。アリストテレスは、すべての動物は、人間は別であるが、耳を動かすことができると述べている。そしてそれは理にかなったことなのである。なぜならば人間は、耳で聴いた神の掟を絶えず魂と心にとどめおくべきだからである。

どの動物も、水生動物であるワニを除き、下顎を動かすことができる。またケンキル (cencil)² は、また後に触れるように、上顎を動かすことができる。

広すぎることも狭すぎることもない幅の（これが節度ということなのだが）舌はりっぱである。それこそが人間が持つのにふさわしい大きさだからだ。つまりこれは、人は言葉に節度を持つべきことの譬えだと理解しなさい。なぜならば、多言は過ちを伴うからである。しかしまた人は、盲人や吠えることのできない犬のように寡黙であってもいい。

人の眼は、人と同じ体格の他の動物の眼よりも真ん中に寄っている。それは、人の理性と感情とが、そして神の認識と人間自らの認識とが一つになるためである。

ところで、アリストテレスによると、毛の長い尾をした動物は、頭が小さく顎が大きいという。それと同じように、王侯たちは、多くの召使たちを引き連れているために、まるで長い尾をしているよ

うに見える。そのため、彼らの頭（つまり智恵とか理性のことだが）は小さく、逆に顎（つまり食欲のことだが）は大きいのである。2本の角を持つすべての動物には上歯がないが、胃が2つある。前の方の胃に食物をまずためて反芻したものを、さらに後ろの胃が受け取るのである。しかし、角のない動物には、人間、ライオンやその他の動物のように、胃が1つしかない。動物体内の過剰な湿気と蒸気によって体毛が生じるのだが、過剰な湿気は食物摂取が多すぎることに起因する。脂肪の多いすべての動物は精子が少ない。同じように、多くの財産を持つ人々はあまり善きことをなさない。これは、大きな富にすっかり心を奪われてしまい、神のことにもおのれ自身のことにも考えが及ばなくなるためであると知りなさい。アリストテレスは、体毛の多い全ての動物と羽毛の多いすべての鳥は、繁殖力が旺盛であり、精子が多いと述べている。脂肪が動物体内で増えれば増えるほど、動物の血液は益々減っていく。血が多い人はだれでも早く老け込む。それは過度の湿気を含む穀物と同じことである。まだ母乳を飲んでいる反芻動物の子供の胃の中には凝塊³が見つかる。凝塊は古いもののほど質がよく、特にウサギやシカのそれはリュウマチに効く。

動物のメスは、オスよりも体が弱いが、クマとヒョウはその限りではない。4足動物ではメスはオスよりも物覚えが早い。アルフラガヌス⁴によれば、イヌの乳は、ブタやウサギの乳を除く他のすべての動物の乳よりも濃いという。また彼は、すべての4足動物は春に最も強い交尾欲を示すと述べている。湿った場所で餌を求めるすべての4足歩行の動物の肉は有害である。太くて短い尾を持つすべての動物には、長い尾を持つものよりも冬が辛い。牝ウシは牝ウシよりも声が大きい、そのほかのすべての動物ではメスはオスよりも声が小さい。

またアルフラガヌスは、ウマ、ロバ、ゾウ、ラクダは、他の動物のように、特別な胆嚢はもたないかわりに、胆汁が血管に入っているという。彼によるとさらに、オオカミ、キツネ、イヌは、子がまだ視力を持たないうちから産み落とす。またアリストテレスによれば、占い師あるいは預言者たちはこう述べているという。動物たちが互いから離れていくのは、人間の間に争いが起こることを、反対に動物たちが一つの群れをなして並んで進んでゆく姿は、平和が訪れることの印である。彼はまたこうも言う。どんな動物であれ、一ヶ所に長くいて餌が少なくなると、オスはメスと、オスの親はオスの子と争うようになる。しかし、餌が十分あると、野生動物は元気を取り戻し大人しくなる。動物同士の争いは、唯一餌と住みかをめぐらるものである。生肉を食べるすべての動物は、他のすべての動物と争いになる。というのも後者が前者の餌となるからだ。

水気の多い体質の動物は臆病である。臆病が体質を冷たくするためである。温血動物には肺がついているが、それは吸い込んだ空気によって体内の熱を冷ますためである。しかし、冷血動物には肺は必要ない。

体毛の多い動物は精子が濃い。それと同様に、いつも肉体の欲望に生きる人は、汚れなき行いをなすことができない。髭や胸毛の濃い人は、すぐに子供ができる。毛が黒い人の場合には特にそうなのである。眉毛のある動物は、ウサギとライオンを除き、眠るときには瞼を閉じる。鋸状の歯をもつ役畜は肉食である。それは、貧乏人の財産を食い尽くす悪しき使用人を雇っている王侯たちのことを表している。多くの歯をもつ動物は、たいいてい長生きであるのに対し、歯の少ない動物は短命である。肺のない動物は声を発しない。しかし、肺があるのに声を発しない動物もいる。唯一人間を除き、寝ている時であれ、起きている時であれ、その精液をメスの子宮の外に流すいかなる動物もない。それは人間の悪徳のせいである。あらゆる動物の成長は、自然の欲望に起因する。同様に我々の幸せが

一番大きくなるのは神によってである。神は我々の理性がもっとも強く求めるものだからである。

反芻動物は、反芻のおかげでより健康でいられる。なぜかといえば、それにより満足が得られ、反芻しない他の動物に比べ、より少ない量の食物ですぐに肥えるからである。それは反芻によって満足がもたらされるためである。それと同じように、絶えず神の教えに立ち返り、敬虔な気持ちでそれに思いを寄せる人の魂は、神の恩寵に溢れ神の愛に酔うのである。胆嚢のない動物は、ゾウ、シカ、ラクダ、イルカのように、みな長生きである。それと同じように、心やさしき人は、永遠の命の中でこの世の人々の土地と財産とを受けとる。

4足歩行の動物には尾があるが、人間にはない。しかし、人間には尾の代わりに尻があり、他の動物で尾のあるところが尻となっている。クマやサルも同様である。体の大きな動物は、子どもをたくさん産むことはない。というのも餌と滋養の多くは体内で分解され各部位に送られるために、余剰分が少なくなり、その分精子が減るからである。それと同じように、司教、司教座聖堂主席司祭、あるいはその他の高位聖職者といった大変名誉ある職に就いているこの世の人たちも、遺憾ながら、説教やその他の良き行いによって実りをもたらしことが少ないのである。なぜかといえば、小さき者ほどその心はより大きなものを求めるからである。

食物を噛まずに飲み込む動物は、オオカミやライオンのように、痩せている。というのも、食物が十分に噛み碎かれないために、体に十分な栄養として行き渡らないからである。幾人かの人たちが、我々よりも多くの動物は五感の点で勝っていると述べている。例えば、クマやイノシシは聴覚で、ヤマネコは視覚で、サルは味覚で、ハゲタカは嗅覚で（屍肉の匂いを遠くから嗅ぎわけるので）、クモは触覚でというように。オオカミやその仲間のように、食物がすぐに胃を通過する動物は、満腹にならない。鳥では、ペリカンやラテン語でメルグス（mergus）と呼ばれるアビなども同様である。それと同じで、神のことは聞き流してすぐに忘れてしまう人間も、良き行いが少ないため痩せこけている。というのも、多くの人がこんなことをいうからである。「ああ、今日の司祭様の説教はなんとありがたい説教だったことか」それで私が「何のお話をされたのですか」と尋ねると、「本当のところはわからないのです」と答えるありさまなのだから。人間には8本の肋骨があるが、10本ある人もいる。しかし、角のある動物には13本の、ヘビには30本の肋骨がある。プリニウスは、生まれつき長生きの動物は、母胎にいる期間もより長いと述べている。ところで、「なぜ反芻しない動物がいるのか」と質問する人がいるが、それはこういうことなのである。動物の中には、ブタ、イヌやその仲間のよう、熱い胃を持っているものもいて、それが食物の消化を助けるため、吸収しやすくするために反芻する必要がないからである。一方、冷たい胃をもつ他の動物は、反芻することで食物を2度細かく碎き、消化しやすくするのである。それにはウシ、シカあるいはそれと同類の動物が含まれる。それらの動物は、熱い胃をもつ種類よりも脂肪が乾いているため固く、皮脂が頑丈にできている。ところで、胃が熱いそれらの動物とは、聡明な生徒たちのことである。彼らは学ぶことに熱意と愛情を傾け、聖書という食物をまったく容易に吸収するからである。反対に、胃の冷たい動物は、学ぶことを怠け、聖書を理解できない生徒たちを表している。というのも、だらしのない悪しき魂には、ソロモンが言っているように、知恵が入っていかないからである。他人より硬い脂肪を持つものとは、神への信仰を忘れ、快楽と欲望に溺れ、昼ではなく夜に仕え、すぐに怠けてしまう人のことを指す。なぜなら彼らは未来の救いを忘れ、むなしいこの世に身を捧げるからである。しかし知っておくべきは、ヒツジは熱い胃を持っているにもかかわらず、反芻するということである。それは、歯が悪いため食物を噛み

碎くことができないからだ。すでによく知っていることを何度も読み返す聡明な学者や生徒たちは、それと同じことをしているのである。なぜなら、彼らにはこの世の快樂を味わうための鋭い齒を持ち合せていないからである。

さて私はこれまで動物一般について語ってきたが、これからは、動物を一つひとつとりあげて説明していこう。まずその名前がラテン語のAで始まるもの、次にBで始まるものというように、ABCの順に述べていくことにする。

1. ロバについて

ラテン語でアシヌス (asinus) と呼ばれるのは、ドイツ語でエーゼル (esel) つまりロバのことである。この動物は大変大人しいので、争うということを知らない。そのため、鞭で強く打つと穏やかで従順になる。またどんなに重たい荷物も背負うことができるというのが、ロバに与えられる褒め言葉である。しかし、淫乱であることが彼らの欠点である。ロバは前脚より後脚が強く、歩みがのろい。また、頭が悪いので、向こうから来た人をよけることをしない。ロバは、若い時にはなかなか好ましい姿をしているが、年をとるにつれて不格好になる。

プリニウスは、メスのロバの乳は真っ白で、人の肌を白くすることに役立つと述べている。そのため皇帝ネロの妻がロバの乳の風呂に入ったという記録がある。ロバの肉はそれを食べると血行が悪くなり、胃の中で消化しにくくなるが、馬肉よりはましである。まだ温かいロバの乳は齒を丈夫にし、特にそれを患部にすり込むと、齒の痛みを和らげる。また心臓喘息を取り除いてくれる。

ロバは生まれつきとても体温の低い動物である。アリストテレスの言葉によると、ロバは他の動物よりも寒さを恐れるので、ウマのように昼と夜の長さが同じ季節に交尾をせず、出産が温かい時期になるよう夏に交尾をするのである。メスのロバは、丸1年間子どもを体内に宿す。プリニウスは、ロバの骨は他の動物の骨よりも白いと述べている。

メスのロバが子供を一度に2頭生むことはまれである。また、出産が近づくと明るい場所を避け、人目につかないように暗がりを探す。それゆえ聖書は、「汝の左手に、右手のなすことを知らずな」と言うのである。メスのロバは、生きている限り子を産み続け、それは30年にも及ぶ。それを見習って、人間も死ぬまで善き行いにおいて多産であるべきである。そのため聖書でも「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と言われるのである。また、ロバの中には慣れ親しんだ泉の澄んだ水しか飲まないものがある。

それゆえ聖書は、預言者エレミアによる『エレミア書』（第2章）においてこう述べている。「一体なぜなのか。なぜあなたはエジプトに行って濁った水を飲むのか（濁った水とはこの世の智慧のことである）。そして、なぜあなたはアッシリア人と呼ばれる人々の土地に行き、流れる水を飲むのか（これは神の命の智慧のことである）」ロバに橋を渡らせようとして、ロバがしきりに橋の下の水面を見るときには、橋を渡らせることは容易ではない。

言っておくが、ロバは体の前のほうが弱く、そこの背中に仙骨部 (kräuz) があり、反対に腎臓のある体の後ろのほうが強靱である。そして、我々贅沢に暮らす聖職者もそれに似たり寄ったりである。つまり、断食、祈り、そして神へのあらゆる奉仕を通して十字架 (kräuz) を背負わねばならない時に、我々は遺憾なことに意志が弱くなり、反対にふしだらで自堕落な日々を送る時には、意志が強固

になるからである。

2. イノシシについて

ラテン語でアペル（aper）と呼ばれるのは、ドイツ語でエーバー（eber）つまりイノシシのことで、それには野生のイノシシと飼育されたイノシシの2種類がある。野生のそれを躰けて大人しくさせることはできない。つねに凶暴であり続けるからである。その体は黒く、半フィートの長さの牙を持ち、イノシシが活着している時には鋼鉄のごとくに何でも碎くが、イノシシから抜いてしまった牙は、前ほど固くはない。ところで、イノシシは乱暴な人々の象徴である。彼らは、良き書物の教えを受け入れず、いつも乱暴で罪に黒くそまったままであるからである。そのような人々は、牙が自分の方に曲がっている。というのも、他人に害を及ぼそうとするものは、まず自らを殺すからだ。彼らの牙は半フィートしかないので、隣人の体を傷つけることができて、魂にまで危害を及ぼすことはない。乱暴でいられるのも活着している間だけで、死んでしまえばそれもできないのである。この獣には、放尿を終えないうちに獵師が狩りを始めてしまうと、すぐに疲れてしまう癖がある。反対に、前もって放尿を済ましている場合や、狩りの間に放尿をする場合には、イノシシを捕えることはそう簡単ではない。温かく新しいイノシシの糞は鼻血に効く。メスのイノシシが妊娠中にドングりをたくさん食べる時は、お産が近いことを表す。イノシシには、地面を掘り起こし、鼻で汚い泥をかきまわす習慣がある。メスのイノシシが生む最初の子は、それ以降の子供よりも体が弱い。子供をたくさん産んだメスのイノシシの乳は、とてもきれいな色をしている。

3. 飼育されたイノシシについて

飼育されたイノシシ、つまりブタの群れでは、他のどのブタよりも一段と強い一頭のブタがいて、他のすべてのブタのリーダーとなる。しかし、同類でもっと強いものが戦いによってそのブタを打ち負かすと、今度はそのブタが支配者となる。1頭の子ブタが泣き始めると、群れ全部が怒って騒ぎ出し突進してくる。その怒りは、群れに酢を蒔きかけるとおさまる。メスブタは去勢すると早く太る。片目のブタは正常なブタより早く死んでしまう。母ブタが子ブタを産むと、子ブタの中のメスではなく、まずオスに乳を飲ます。月が段々と欠けていって最小になると、メスブタの脳も他のいかなる動物の脳にまして小さくなり、やがて最後にはブタの体の大きさからするとあり得ないほどにまで小さくなる。

4. ヘラジカについて

ヘラジカは、プリニウスとソリヌス⁵が述べているように、草原に餌の草を探し求める時には、後ろ向きに歩く動物である。それは、頭から着るべき服を下の方の足のほうから着ようとする人に似ている。またそれは、自らの罪に悔いて涙を流さないうちからあれこれと思案した末、神の恩寵をあてにして歓声をあげようとする人々のようでもあるし、弟子になる前に親方になろうとする生徒のようでもある。

5. アカシカについて

アリストテレスは、アカシカと呼ばれる動物について述べているが、それは一般のシカ（hirz）と同じくらいの大きさだという。だがこの動物において自然はある一風変わった習性を与えた。というのも、他の全ての4足動物では胆嚢が体の内部にあるのに対して、この動物だけがそうではないからである。すなわち、この動物の胆嚢は耳にあり、そのとても苦い胆汁がこの動物を大変怒りっぽく凶暴なものに変えているのである。これはちょうど人々を中傷する偽善者のことばに耳を傾ける者たちのことを示している。彼らの言葉に惑わされる人は、善を悪に変え、罪なき人々の魂を有害な不誠実さで毒殺してしまうのである。

6. 水牛について

ラテン語のブバルス（bubalus）つまり水牛は、ドイツのある方言ではアウルリント（aurrint）と、また別の方言ではヴァルトリント（waltrint）と呼ばれている。見た目はのろまで大人しいが、怒ると敏捷で凶暴になる。それは一般的なウシよりも大きな体をしている。水牛の乳には、人間の緊張を容易に和らげ生傷を治してくれる効果があるし、また毒をのんだ人にもよく効く。さらにその胆汁は薬にもなる。というのも、胆汁は傷を治して瘡蓋にしたり、耳の痛みを治したりしてくれるからだ。水牛には次のような性格がある。人が無理やりに重い荷を背負わせると、ひどく怒って地面に座り込み、どんなに叩こうとも、過重な荷物を軽くしてやらない限り簡単には立ちあがろうとしない。この動物はラテン語ではビソーン（bison）ともいう。

7. ボマクスについて



図1 ボマクス（ボナコン）

出典：『ヨーロッパ怪物文化誌事典』p.192

ボマクス（bomachus）⁶ と呼ばれる動物は、ソリヌスが言っているように、頭はウシで、胴体と腿がウマの姿をしている。その角は内側に曲がっているのもので、角を突き立てても他の動物を傷つけることはない。この動物には次のような特徴がある。狩りの的になると、やわらかな糞を狩人めがけて1ヨッホ⁷も投げつけ、糞の匂いが及ぶ範囲の人にやけどを負わせる。この武器によりボマクスは敵を追い払う。この動物は、人々の上に立つりっぱな主席司祭に警えられる。角を内側に曲げて常に誠実に生きているからである。戒めのこと

ばという角を下々の者たちに向ける時も傷つけたりはしない。なぜならば、下々の者たちにことばで教諭す内容を実際の行いで示すからである。

8. ラクダについて

偉大なバシリウス⁸は、ラクダは自分が被った不正のことはずっと覚えていて、激しい怒りをいつまでも抱き続ける、と述べている。人に打たれても、ラクダは長らくそのようなそぶりなど一切見せないが、機が熟したとみるとただちに仕返しをするのである。ラクダは、大麦を素早くのみ込み、体内にとどめておくが、それは夜に反芻して再度食べるためである。幾人かの人は、ラクダは憐れみの心を持っているという。群れの中や納屋にいるラクダの1頭でも、病にかかり餌を食べなくなると、全ての他のラクダたちも、まるでそのラクダに同情するかのように、一緒になって餌をとらなくなるからである。

発情期になって交尾を求める時には、ラクダは人に見られないように、人目につかない場所を探す。というのも彼らは後ろから交尾をするからであり、そしてまたメスがオスに対して激しい性欲を覚え、欲情のためうめくからである。プリニウスは、ラクダの腦みそを乾かし酢につけたものを飲むと癲癇に効くと述べている。ソリヌスは、ラクダは過重な荷は受け付けられない、と述べている。また、ミヒャエル・フォン・ショットラント⁹は、ラクダの子供は生まれるとすぐに草原の草を食べ始めると述べている。また、アリストテレスによると、ある男が子供のラクダの母親をマントで覆ったことがあったという。その子供のラクダが母親とは知らずに交尾することを防ごうと思ったからであった。しかし、母親と交尾する前に、その子供のラクダは誤りに気付いてそのような行為をやめにし、その男を殺してしまったという話である。母親と交尾しないというのがラクダの習性なのである。

9. イヌについて

ヤコブス¹⁰は、イヌはどんなことを躑いても物覚えが良く、たとえどれほど眠ることが好きであっても、寝入ることなく主人の家を見張る、と言っている。イヌは主人を敬愛するので、しばしば彼のために死をもいとわない。理性を持たないあらゆる動物の中でイヌだけが自分の名前を認識する、とソリヌスは述べている。ヤコブスは、また、イヌのなかには大いなる敵意を抱いて匂いを追跡し、ついには泥棒を人々のなかから嗅ぎわけることができるものがあるという。さらにヤコブスの言うところでは、イヌのなかには主人の机の下にひかえているときでも、一方の眼で主人の慈悲深き手に常に注意を払い、またもう一方の眼で主人の家のドアを見張るものがあるという。イヌが人を獐猛に追いかけることがあっても、その人が地面に倒れるとイヌの怒りは収まる。イヌが生む子イヌは、生後12日間あるいはなかに3週間目が見えないものがある。イヌは子イヌを40日腹に宿す。発情期の最中は、彼らは交尾に対していさぐ過度の欲望により寄り添ったまま離れない。最も優れたイヌとは、最後に目が見えるようになったイヌか、あるいは母イヌが最初に連れ去るイヌのことである。

ところで、狂犬病は、去勢された鶏の肉を蜂蜜と混ぜ合わせたものをそのイヌに食べさせると退治することができる。狂犬病にかかったイヌに噛まれることは危険であるが、野生のバラの木の根で治すことができる。イヌの乳は、ブタやウサギのそれを除き、他の動物の乳よりも濃厚である。イヌは、子どもを産む7日前から乳が乳首にたまる。イヌが打たれて泣き声をあげたりすると、他のイヌたちは怒ってそのイヌを襲い噛みつくという。覚えておきなさい。全ての動物においてオスはメスよりも生まれつき長生きするが、イヌだけは例外である。それは仕事がかついなどのせいである。イヌは病

気になると、舌をひどく刺激する薬草を食べる。すると胃の中の良くない体液を吐き出すことができ、元気になる。アリストテレスは、イヌの年齢は他でもない歯でわかるという。若いイヌの歯は鋭くて白いが、年老いたイヌのそれは先端が丸くて黒いからだ。ある人々は、イヌは人間なしには生きていけない動物で、家人に家の外へ追い出されると怒りだす、と述べている。イヌは自分自身の傷や仲間の傷を舌でなめて治すので、イヌの舌は医者と同じといえる。

さらにまた牡イヌは、牝イヌを嘆き悲しませることを好まない。それはその他多くの動物の習性である。そのように神は賢くも理性をもたない動物において定められたのであるが、それは人間もそのようにすべきことをお示しになるためであった。なぜならば、男と女が不仲であれば、つらい多くの時を過ごすことになるからだ。強者は弱者に対して寛大であり、またより弱き者はより強き者に従順であるべきである。イヌには、どんなにきれい場所や衣服をも汚したり濡らしてしまうという悪しき習性がある。イヌの皮から作った靴をはくと痛風に効く。しかし、イヌが足にその匂いを嗅ぎつけると糞尿で汚されてしまう。他の病気の動物にイヌの血を与えると健康になる。人を噛んだイヌが狂犬病にかかっているかどうかは、次のようにしてわかる。火でよく焼いた木の実で膏薬を作り、それを1日と1晩傷口にあてておいたものを腹の空いたオスあるいはメスのニワトリに与えてみる。もしニワトリがそれを平気で飲むならば、噛んだイヌは狂犬病ではない。だが、それを飲まなければ、それは狂犬病のイヌであって、オスあるいはメスのニワトリは死ぬことになる。しかし、それでも1日と1晩はまだ生きている。さらに、狂犬病のイヌに噛まれた人の傷口の血に浸したパンをイヌに与えても、健康なイヌなら食べることはない。さらにまったく不思議なことだが、狂犬病のイヌに噛まれた人がまるでイヌのように子イヌをなめ、イヌのように吠えたりすることがよく起る。アレクサンダー¹¹⁾は、噛まれた人をいかにして治療するべきかについて、「私であれば、傷口を1年間開いたままにしておき、瘡蓋や皮膚で覆ったりしないように助言するであろう」と述べている。

10. ビーバーについて

ラテン語のカストル (castor) は、ドイツ語ではビーバー (piber) と言い、アリストテレスは、ビーバーの睾丸はカストリウム (castorium) と呼ばれる、と述べている。つまりドイツ語でいうところのピーバーガイル (pibergail)¹²⁾ つまり海狸香のことである。プリニウスによると、ビーバーは胆汁を嘔吐するという。海狸香は大変多くの薬に向いているので、ビーバーは人間たちはそれ欲しさのために自分たちを狩りの的にするのだと思っている。ビーバーの胃液は癲癇に効く。この動物は同じ場所にじっとしていることが苦手である。ただし尾が水中にあるときは別なのだが、それはその尾が魚のそれに似ているからだという。海狸香には体を温めて乾燥させる効果があり、それにより痙攣を引き起こす体内の余分な蒸気と湿気を追い払うことができる。それはまた血管の病気のせいで震える手にも効く。海狸香をワインで煮たものを病人の体にすり込んでマッサージし、それが皮膚の表面にとどまって匂いを発しているならば、それは病人の手足の麻痺に効く。この動物には次のような習性がある。猟師に狩りたてられるとビーバーは、自らの睾丸を噛み切り置いておく。なぜかという、そうすれば海狸香のために狩りの的になることはないと思うからである。

11. ヤギについて

カブラ (capura) はヤギのことで、家畜と野生の2種類がある。ヤギのミルクはとても甘い、固まるやいなや有害となる。ヤギのミルクは、人間の母乳の次に優れた性質を有するが、アリストテレスによると、ヤギのチーズはよいところが一つもないという。ヤギはまた太ると繁殖力がなくなり、有害な寒さによって流産する。

12. カモシカと呼ばれる野生のヤギについて

野生のヤギは、高山を好む大変賢い動物である。歩いている人が獵師なのか、それともそうでないのかを遠くからでも識別できる。幾人かの人は、野生のヤギは耳からも鼻からも呼吸しないと述べている。野生のオスヤギは、盛りがつくと白目をむきだす。彼らは夜も昼と同じくらい目が利く。そのため彼らの肝臓は、かつては夜も目がよく見えたのだがその後視力を失ってしまった人に大変効果がある。野生のオスヤギの胆汁を醗に付けると、目のかすみを追い払い、ものがはっきり見えるようになる。また野生のオスヤギの胆汁をカエルがいる場所に置いておくと、そこにいるすべてのカエルがそこに集まってくる。アリストテレスはこう述べている。野生のオスヤギは、昼はしばしば盲目になり目がよく見えなくなるが、夜になると彼らの眼は鋭くなる。野生のヤギの角をあぶり、匂いのするうちに癲癇を患っている人の鼻先にもっていくと、その人はすぐに気絶してしまう。その匂いはまた蛇を追ひ払う。新鮮かつまだ温かい野生のヤギの血には、鉄でさえも砕くことのできない固いダイヤモンドを砕く力がある。プリニウスは、野生のヤギは毒草を食べても死なない、と述べているが、なかには蜂蜜を食べると死ぬ、という人もいる。野生のヤギに齧られることは樹木にとって大変有害である。またオリーブの木は、舐められただけで実をつけなくなる。野生のヤギは、弓矢で射られるとハッカの草を食べるが、それは刺さった矢を体からできる限り早く取り除くためである。

13. ノロジカについて

ラテン語でカプレオラ (capreola)、あるいはプリニウスがルピカブラ (rupicapra) と呼んでいるものは野生のヤギのことで、ドイツ語ではレー (rêh) つまりノロジカのことである。これは仲間同士でいると大変獷猛な動物である。しかし、他の動物に対しては臆病で大人しい。オスのノロジカは、盛りの時期になるとメスをめぐって争いを始める。

14. カテーンについて

カトゥス (cathus)¹³ とはアルカディアに棲む動物であり、汚いブタよりもはるかに臭い。大学者アデリーヌス¹⁴はこの動物について、喉から火を吐くと記している。そうするのはとりわけ腹を立てたときである。この動物は、『知恵の書』¹⁵で口から火を吐くと言われる動物に似ている。その動物とは、腹を立てて人を中傷誹謗する者たち、そして老婆たちのことである。彼らは善良な人々の名誉を火で、つまり彼らの喉からでる言葉で黒く汚すからである。

15. シカについて

ケルヴス (cervus) とはシカのことである。シカについてアリストテレスは、すべての動物の中でシカだけしか角を落とさない、と述べている。シカ以外のすべての動物の角は中が空洞である。シカは自分の角をととても誇らしく思っている。プリニウスはこう述べている。シカは病や老いに苦しむと、鼻先を使って蛇を巣穴から引き出して食べる。食べ終わると蛇の毒のせいで喉に渴きを覚えるので、すぐに泉へ行って急いで水を飲む。それによって若返り、生気を再び取り戻すためである。人の話では、シカは遠くからでもクジャクやその他の動物の焼けた羽根の匂いを嗅ぎつける。またシカは、炙ったクジャクの羽根で地面に書かれた円から外に出ない。

ソリヌスは、シカが熱を出したり、病気になったりしたことなど聞いたことがないと述べている。それゆえシカの骨の髄で作った膏葉には、病人の熱を和らげる働きがある。

出産の時期が来るとメスジカは、オスジカのもとを離れる。メスジカは、お産がそれだけ軽くすむようにと、お産の前に薬草を食べて腸を空にしておく。ソリヌスによれば、メスジカは、産んだ子ジカを大切に保護するために藪の中に隠し、一人前になるまでひづめで押さえて外に出ないようにする。母の胎内で死んだ子ジカの肉は、毒に効き、蛇にかまれた人間を治す。シカはイヌに追い立てられると、イヌが吠える声を不思議に思い、イヌの吠える声が追いかけてくるように風下に向かって走る。毎日朝早くシカの肉を食べる人は、ラテン語でフェーブレス (febres) と呼ばれる熱病にかからない。

ところで、シカが角を落とし再び新しい角が生えてくると、アリストテレスとプリニウスによれば、日向に立つことを好むという。それは太陽の熱により角を乾かし、丈夫に成長させるためである。そしてその後で、樹のところまで行って角をこすりつけ、丈夫かどうかを試す。丈夫であることが分かると、自らを守る武器を手に入れたことで安心して外を歩くことができる。しかし、りっぱな角が生えない限り、シカはオオカミが怖いので外を歩くことはせず、身を隠して夜に餌をさがす。彼らは、角は人間にとって役にたつものなので、落とした角を水の中に投げ込む。それというのも、シカは、角が人間にとって役立つものだというのを、そして特に右の角が蛇に噛まれたときに効く、ということを生まれつきよく知っているからである。角を焼いたときの匂いがしてくるとヘビは、それが左の角であろうと右の角であろうと、逃げていく。

プラテアリウス¹⁶によると、シカの心臓にはそれを支えている骨が1本ある。その骨を取りだし、固くしてから粉末にして病人に処方すると、心臓の痛みとめまいに効果がある。人の話では、シカのあるものは胆嚢が尻尾に、またあるものは、アリストテレスが言うように、耳についているという。シカの臓腑は大変臭いが、プリニウスが言うには、それは胆汁が臓腑に含まれているからである。そのためイヌはシカを、余程空腹な場合は別だが、食べることはない。

シカの頭の中には虫がいて、シカをしばしば苦しめる。しかし、人間も含めどの動物にも舌の下に虫がいる。本書の手本となったラテン語原典¹⁷によると、静脈が背骨とぶつかる所、また背骨が頭蓋と接しているところには虫が20匹いるという。しかし、まことに申しあげるが、それは私には奇妙で信じがたく思える。ただし、その虫というのが、第1章でそれについて述べたような、小さな筋肉のことであるならば話は別なのであるが。いずれにしても疑わしい話である。

シカはキツネの鳴き声を恐れる。仲間うちの争いで他のシカに打ち勝ったシカは、同類たちの支配者となり、他のシカたちは彼に服従し、1頭の支配者のもとで平和に暮らす。人間に捕まえられたシ

カの子供を少しの間縄につないで連れて歩くと、その後はつながなくとも人間についてくる。シカの肉は黒胆汁質なので、胃の中で消化しづらい。ラテン語でいうヒンヌルス (hinnulus) とは子ジカのことである。子ジカの肉のほうが大人のシカのそれよりも上等であり、去勢したものはさらによい。というのもそうすると、肉の熱と湿り気がそうしない時よりも穏やかになるからだ。シカは心地よい音が好きなので、ひどい目に遭うとも知らずに、先程逃げてきた犬たちのところへ、彼らの吠える声につられて戻ることがある。

16. カタプレバについて

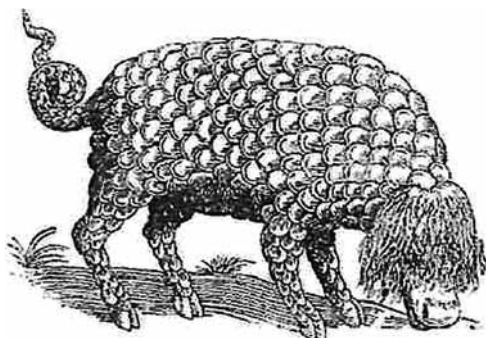


図2 カタプレバ (カトプレバス)

出典：『ヨーロッパ怪物文化誌事典』 p.156

カタプレバ (cathapleba)¹⁸ は、エジプトのナイル川に棲む動物である、と大学者のプリニウスとソリヌスが述べている。その目は毒で、目を見る者はすぐに死んでしまう。それは、多くの人の魂を殺す淫らな人の目のことである。目は知らないうちに魂を盗む泥棒である。

17. キュログリルスあるいは大ハリネズミについて

キュログリルス (cyrogrillus) は、『旧約聖書』が食べることを禁じた動物である。ドイツ語ではイーゲル (igel) つまりハリネズミのことである。しかしパピアス¹⁹は、キュログリルスはハリネズミよりも大きいと述べている。この動物は、生まれつき体が小さく弱々しいが、不思議な性質を持っている。というのも、たとえどれほど弱々しく見えようとも、攻撃的で獰猛であり、他の生き物に危害を加えるからだ。キュログリルスはハリネズミのことである、と言っている人もいるが、それは間違いで、ハリネズミよりも大きな体をしている。

18. カロプスについて

カロプス (calopus)²⁰ の角はユーフラテス川の常緑樹や茂みに絡まってしまふ。そこから抜けられなくなると、大きな声で啼く。獵師はそれを聞きつけて捕まえる。それと同様に、肉欲とこの世の富を追い求める人々は、永遠の死に絡められてしまふ。それゆえ、預言者エレミア²¹は、「彼らはユーフラテスの川のそばで捉えられ死んだ」と述べている。



図3 カロプス (アントロップス)

出典：『フィシオログス』 p.35

19. キュログラーテスについて

キュログラーテス (cyrogrates)²² は、ハイエナと呼ばれる動物と同じように、人間の言葉をまねる動物である。この動物は常に目を開けている、とソリヌスとヤコブスが述べている。この動物には歯茎がなく歯も1本しか生えていないが、それは生来決してすり減ることがなく、大変固いので捕まえたものはなんでも切断できる。この動物はメスイヌとオオカミの合いの子である。

ところで、読者のあなたは私にこう不満を述べるかもしれない。「あなたは多くの動物の名前をギリシャ語であげているが、それらをドイツ語で呼ぶべきではないか。さもないと、ラテン語の原典²³をドイツ語に正しく訳しているとはいえないのではないか」それに対して私はあなたにこう答えるでしょう。「ドイツの国に存在しない動物やそれ以外の事物には、ドイツ語の名前はないのである」と。それゆえ、あなたの指摘は的外れなのである。

20. ダマジカについて

ダムラ (damula) は、ドイツ語で「臆病な手」(scheuhand) と呼ぶことができるような動物である。なぜかという、人間が差し出す手を恐れるからだ、とイシドール²⁴は言っている。この動物は臆病で体が弱い。それについて大学者のマルチアリス²⁵はこう述べている。イノシシは牙で、シカは角で身を守るが、ダマジカは争いを好まない。それにしても我々人間は何者であろうか。欲しいものは何でも奪い取る泥棒ではないのか。ところでこの動物は、人間を誘惑する悪魔に対し抵抗しようとなしない人々の譬えである。この動物はイングランドに生息し、その大きさと姿はノロジカと変わらない。

21. テンについて

テンは凶暴で怒りっぽい上に、動きが敏捷で力の強い動物である。この動物には次のような習性がある。猟師に迫られもう逃げられないと観念すると、体内に溜めた糞を猟犬めがけて噴出し、その糞のひどい匂いによって猟犬たちを追ひ払う。この動物は、咎められないようにあるいは悪事を大目に見てくれるようにと、司祭や説教師を贈りもので丸めこもうとする人々のことである。

22. アナグマについて

ダックス (daxus) はドイツ語でダックス (dachs) つまりアナグマのことであり、その大きさはキツネとほぼ同じである。この動物の脂肪は、月が満ちてくると増え、欠けてくると減っていき、月が完全に欠けるとまったくなくなってしまう。この動物の脂肪は、腎臓の痛みや手足の病気を追ひ払うための膏薬として効果がある。この動物に噛まれると危険で重傷となるのに、脂肪には効能があるというのは不思議な話である。

23. ヒトコブラクダについて

ヒトコブラクダは、ラクダと種族も性質も同じ動物である、とラバヌス²⁶は述べている。しかし、それはラクダよりも小さく、足が速い。それゆえにこの動物はギリシャ語でドロメダリウス (dromedarius)、つまりドイツ語で「走る者」(laufer) と呼ばれる。というのも、1日に100マイル以上走るからである。この動物は反芻する。

【訳注】

- 1 プリニウス (Gaius Plinius Secundus) : (22/23~79) 大プリニウス。古代ローマの政治家・博物学者。『博物誌』(Naturalis Historia, 37巻、23~79) の著者。
- 2 ケンキル (cencil) : 不詳。Schulz (1897)、p.93を参照。
- 3 凝塊 (renne) : 乳の中のたんぱく質が、酸や酵素の作用により、胃の中で凝結したもの。
- 4 アルフラガヌス (Alfraganus) : 9世紀前半のペルシャの天文学者。著書に『天の運動と天文知識の集成』がある。
- 5 ソリヌス (Gaius Julius Solinus) : 3世紀前半頃に活躍したローマの文法家・編纂者。その著『ポリヒストリ』は、プリニウスの『博物誌』などから古代世界の不思議な事象を集めたもの。
- 6 ボマクス (bomachus) : ウシの1種で、オーロックス (バイソン) のことと思われる。Schulz (1897)、p.101を参照。
- 7 ヨッホ (joch) : 昔の地積単位。1連のウシが1日で耕す広さで30~65アール。
- 8 バシリウス (Basilus) : (329~379) 初期キリスト教の教父、聖人。
- 9 ミヒヤエル・フォン・ショットラント (Michael von Schottland) : マイケル・スコトゥス (Michael Scotus, 1175~1232頃)。スコットランド生まれの占星術師・数学者。
- 10 ヤコブス (Jakob von Vitry) : (1160/70~1240) エルサレムの総大司教。東洋の風物についていくつかの文献を残した。
- 11 アレクサンダー (Alexander) : 僧ランプレヒトの『アレクサンダーの歌』(Der Pfaffe Lamprecht: „Alexander“, 1130~50)。
- 12 海狸香 (pibergail) : ビーバーは、肛門の近くに1対の香囊を持っていて、香囊の内部には黄褐色の強い臭気を放つクリーム状の分泌物が含まれている。この分泌物を乾燥させて粉末状にしたものが海狸香で、かつては痙攣止めの薬として使われた。
- 13 カトゥス (cathus) : スカンクの仲間か? Schulz (1897)、p.106を参照。
- 14 大学者アデリーヌス (Adelinus) : 聖アルドヘルム (Aldhelm, 639~709頃) の別名。イングランドの学者で、イングランド南部マームズベリー (Malmesbury) の大司教。
- 15 『知恵の書』: 『旧約聖書』の『知恵の書』(11章18節) には「火の息を吐き、音を立てて煙を出し、目から恐るべき火花を散らす動物」とある。
- 16 プラテアリウス (Platearius) : 12世紀のサレルノの医者。
- 17 ラテン語原典: 「解説」でも触れたトマ・ド・カンタンブレの『事物の本質についての書』のこと。
- 18 カタプレバ (cathapleba) : ヌー (ウシカモシカ) のことか? Schulz (1897)、p.108を参照。
- 19 パピアス (Papias) : 紀元2世紀の小アジアのヒエラポリスの主教。
- 20 カロプス (calopus) : 角を生やしたオオカミのような動物のことか? Schulz (1897)、p.108を参照。
- 21 預言者エレミア : 『旧約聖書』の『エレミア書』(20章4節) には「わたしはユダの人をことごとく、

バビロンの王の手に渡す。彼は彼らを捕囚としてバビロンに連れ去り、また剣にかけて殺す」とある。

- 22 キュログラーテス (cyrogrates)：不詳。
- 23 ラテン語の原典：注17同様、トマ・ド・カンタンプレの『事物の本質についての書』のこと。
- 24 イシドール (Isidor)：(560～636) セビリャの大司教。中世に広く使われた百科全書『語源集』(Etymologiae, 622～623)の著者。
- 25 マルチアリス (Marcialis)：3世紀のリモージュ (フランス)の司教のことか？
- 26 ラバヌス (Rabanus Maurus)：(780頃～856)フランクの神学者・学者。マインツ大司教。別名Hrabanus Magnentius。

【参考文献】

1) テキスト：

- Konrad von Megenberg: Das Buch der Natur. Die erste Naturgeschichte in deutscher Sprache. Herausgegeben von Franz Pfeiffer. Georg Olms Verlag Hildesheim・Zürich・New York (3. Nachdruck der Ausgabe Stuttgart 1861) 1994.
- Konrad von Megenberg: Das >Buch der Natur<. Band II Kritischer Text nach den Handschriften. Herausgegeben von Robert Luff und Georg Steer. Max Niemeyer Verlag Tübingen 2003.

2) 翻訳およびその他の文献：

- Das Buch der Natur von Conrad von Megenberg. Die erste Naturgeschichte in deutscher Sprache. In Neu-Hochdeutscher Sprache bearbeitet und mit Anmerkungen versehen von Dr. Hugo Schulz, Professor an der Universität Greifswald. Verlag und Druck von Julius Abel Greifswald 1897.
(<http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/Schulz1897/>)
- Das Tierbuch des Konrad von Megenberg. Ins Neuhochdeutsche übertragen und eingeleitet von Gerhard E. Sollbach: Die bibliophilen Taschenbücher Nr. 560. Harenberg Kommunikation, Dortmund 1989.
『フィシオログス』オットー・ゼール、梶田昭訳、博品社、1994年。
- Lexikon des Mittelalters. 9 Bde. Metzler Verlag Stuttgart/Weimar 1999.
- 蔵持不三也 (監修)、松平俊久 (著)：『図説 ヨーロッパ怪物文化誌事典』原書房、2005年。
- Feistner, Edith (Hrsg.): Konrad von Megenberg (1309-1374): ein spätmittelalterlicher ‚Enzyklopädist‘ im europäischen Kontext. Unter redaktioneller Mitarbeit von Nina Pfrling. Jahrbuch der Oswald von Wolkenstein-Gesellschaft Band 18 (2010/2011) Reichert Verlag Wiesbaden 2011.